

「自然治癒力を高める」新シリーズ

ナチュラル・オルタ

vol.8

Natural &
Alternative
Health Book

自然 代替 健康法

ホメオパシー、アントロポゾフィー医学
バッチフラワー、ハーブ療法…

心と体と生命を癒す 世界の代替療法 西洋編



帯津良一

医学博士・帯津三敬病院名誉院長

板村論子

医学博士・帯津三敬塾クリニック院長

小林国力

医学博士・日本アントロポゾフィー
医学のための医師会代表

山本百合子

医学博士・山本記念病院理事長

上野圭一

翻訳家・鍼灸師

橋口玲子

医学博士・緑蔭診療所医師

鮫島浩二

医学博士・
さめじまボンディングクリニック院長

白石由利奈

日本フラワーレメディセンター代表

横山淳一

医学博士・東京慈恵会医科大学附属
第三病院糖尿病・代謝・内分泌内科教授

安保徹

医学博士・新潟大学大学院
歯学総合研究科教授

代替療法の利用と

心得ておきたい5つのルール

長寿食、全体食、自然食、おいしい 糖尿病予防にもつながる!

地中海型食に学ぶ医食同源

安保徹先生の「新・ミトコンドリア免疫理論」

カラダは温めてばかりではダメ、
ほどよく冷やすべき場所もあった!

病気予防と、自然治癒力を高める代替療法ガイドが好評です!

自然治癒力を高める新シリーズ 第2期7号~12号のお知らせ

ナチュラル・オルタ

今までになかった、まったく新しいコンセプトの健康ブックシリーズ
[ナチュラル&オルタナティブ]ヘルスブックは、ナチュラル・オルタと7号よりよびやすく改題いたします。

2期目のコンセプト
病気になる
5つのアプローチ

- ① エコロジーを取り入れたエコヘルスという考え方
- ② 命のエネルギーを高める生き方・人生観
- ③ 病気になる、免疫力を高める暮らしの実践
- ④ 自然治癒力を高める健康法の知識をより深めます
- ⑤ 病気になるための体のメカニズムを学びます



7号 体に聞く「治す力・癒す力」 しのびよる「病い」を予防する方法

- あなたの知らない体の異常を解消する方法
- 家庭でできる代替療法・野菜、果物、米の効き方、食べ方など
- 誰もが気になる老化、ぼけ、がんのチェック & 予防法
- 知恵、直観を察知して行動する、人と地球の健康の原則



8号 心と体と生命を癒す 世界の代替医療法 西洋編

- ホメオパシー、フラワーレメディ、アロマセラピーなど西洋を起源とするナチュラルな代替療法の特集
- 代替療法の利用と、心得ておきたい5つのルール
- 糖尿病予防にもつながる! 地中海型食に学ぶ医食同源



9号 からだと健康を守る 世界の代替療法 東洋編 (仮)

- 日本に古くから伝わる漢方、伝承民間療法
- お金のかからない、誰にでもできる自然療法
- アーユルヴェーダから学ぶ元気で長生きの秘訣
- 自然治癒力を高めるやさしい漢方養生入門



10号 「文明病・生活環境病」 7つの問題とその解決法 (仮)

- 化学物質過敏症やメタボなど文明病の予防方法
- 現代医学と代替療法の2つの療法の使い分け方
- 健康な生き方の根本的解決法とは何か?
- 病気になるない生き方と病気になる人の生活習慣



11号 がんを予防し、がんとともに 生きる方法 (仮)

- がんについての正しい理解を深める特集
- さまざまながんの予防と治療を紹介し、その長所と短所をわかりやすく紹介
- 「がん」とどう向き合うかを治った人の体験と共通項から考える



12号 代替療法のお医者さん・ 医療機関ガイド (仮)

- 1冊まるごと代替療法の医師・医療機関のガイドブック
- 画一的な医療を越えて患者主体の医療や、できるだけ費用のかからない医療を行っている医師・医療機関を紹介
- 初めて代替療法を受けるときに知っておきたい基礎知識





心と体と生命に働きかける新しい代替療法
2 **世界の代替療法マップ**

監修 上野圭一 翻訳家・鍼灸師

治療の可能性を広げる患者中心の医療を担う
ホメオパシー医学

6 **ホメオパシー医学**

ホリスティック医学を志すものとして、避けては通れない

帯津良一 医学博士・帯津三敬病院名誉院長

13 **専門医として伝えたいこと**

ホメオパシー医学を正しく理解するために、

板村論子 医学博士・帯津三敬塾クリニック院長



日本の病院でも少しずつ実践されつつある
アントロポゾフィー医学

初めて学ぶ、やさしい

20 **アントロポゾフィー医学入門**

小林國力 医学博士・日本アントロポゾフィー医学のための医師会代表

アントロポゾフィー医学を実践する

28 **日本の医療現場からのレポート**

山本百合子 医学博士・山本記念病院理事長



医療としても民間療法としても
人気が高い西洋が起源の代替療法

代替療法の利用と

34 **心得ておきたい5つのルール**

上野圭一 翻訳家・鍼灸師

植物が自らを守るために生み出した有効成分を病気の予防、治療に上手に使う

40 **ゆっくり、ゆったり、ゆるやかに効くハーブ療法**

橋口玲子 医学博士・緑蔭診療所医師

医療の中での実践から学ぶ

46 **心と体のセルフケアに良く効くアロマ療法**

鮫島浩二 医学博士・さめじまボンディングクリニック院長

初心者でも安心して扱える

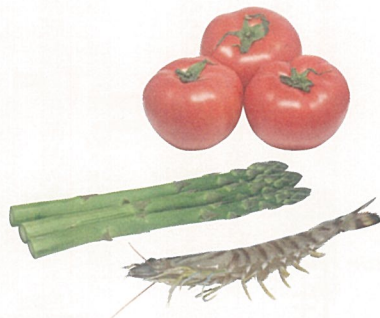
52 **バッチ博士のフラワー療法**

白石由利奈 日本フラワーレメディセンター代表



73 **健康のための本ガイド**

76 **皆様からのご感想・声**



長寿食、全体食、自然食、おいしい 糖尿病予防にもつながる
地中海型食に学ぶ医食同源

57

横山淳一
医学博士・東京慈恵会医科大学附属第三病院
糖尿病・代謝・内分泌内科教授

安保徹先生の「最新・ミトコンドリア免疫理論」

66

カラダは温めてばかりではダメ、
ほどよく冷やすべき場所もあった!

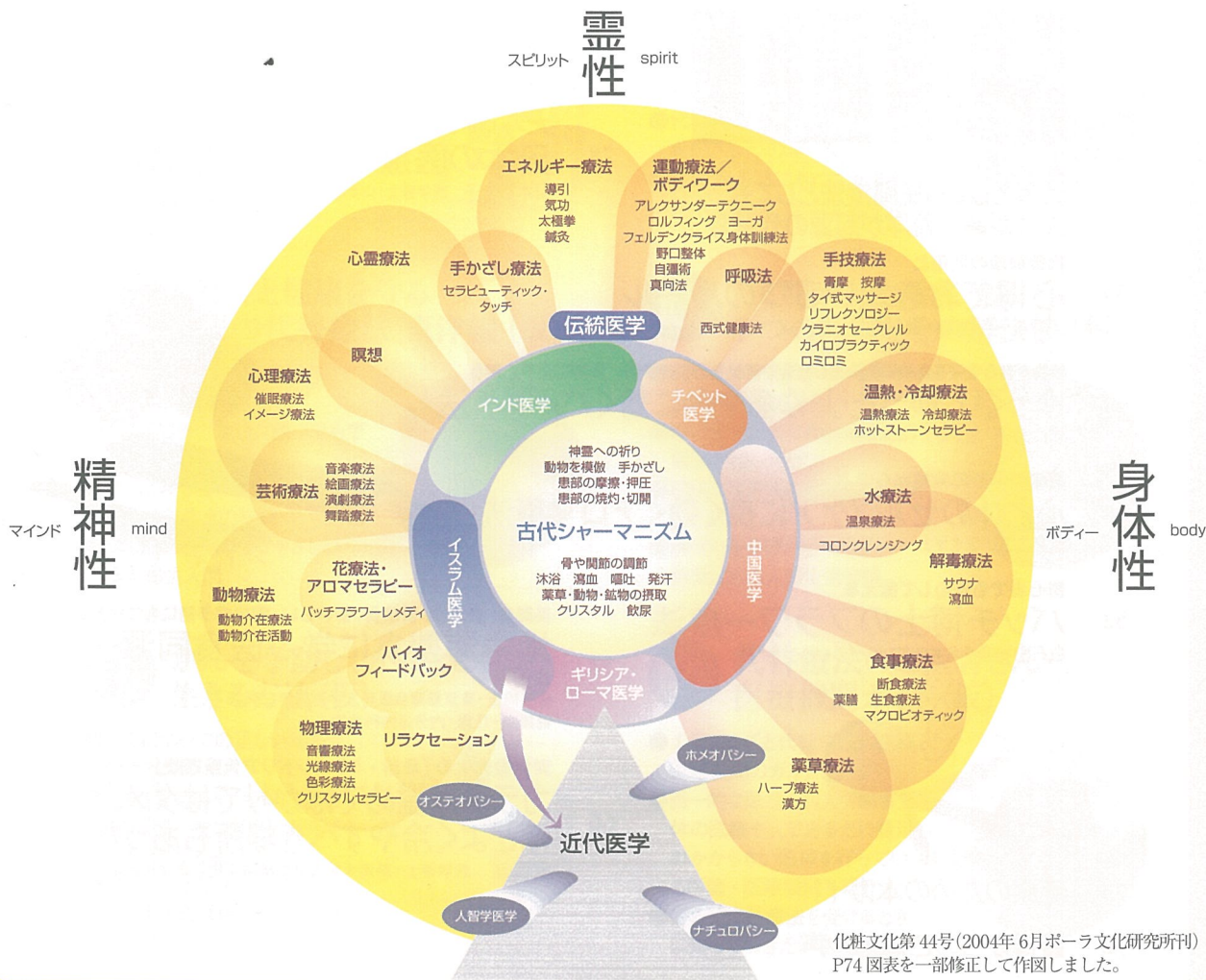
安保徹 医学博士・新潟大学大学院医歯学総合研究科教授

世界の代替療法マップ

監修 **上野圭一** 翻訳家・鍼灸師

利用者の立場からそれぞれの目的にあった代替療法を見つけるために、今号と次号の2回にわたり、現在、注目を集めている代替療法を紹介いたします。(8号で西洋、9号で東洋が起源の代替療法をご紹介します) 代替療法は、その時代的背景や地域的特性から整理すると、下記の「花びら型の分類法」で表せます。この「花びら型の分類法」を見ると、代替療法には、ハーブ(薬草)療法やアロマ(精油)療法のように先人の知恵として生まれたものから、ホメオパシー医学やアントロポゾフィー医学のように近代医学の体系の中から、代替療法に逆に飛び出していったものもあります。

これらの区別は、代替療法を利用する際に治療者も利用者も、その代替療法の治療的効果を十分に得るためには、ぜひ知っておきたい事実です。



化粧文化第 44号(2004年 6月ポーラ文化研究所刊) P74 図表を一部修正して作図しました。

代替療法も現代医学も、 その出発点では 同じである

悪魔払いや呪術^{じゆじゆ}、薬草などを用いて病気や怪我を取り除く古代シャーマニズムを出発点に、世界の各地域で誕生した伝統医学の中で、ギリシャ・ローマ医学とイスラム医学が混ざった文化を母体に生まれたものが近代医学です。

近代医学は、それまでの伝統医学の基礎を築いた古代シャーマニズムの手法をしりぞけ、病気を科学的にとらえる医学体系です。

このギリシャ・ローマ医学に端を発した近代医学は、19〜20世紀に隆盛を極め、現代西洋医学を確立しました。日本でも明治維新（1867年）以前には漢方医学が主流でしたが、文明開化とともに西洋医学が国策によって導入されるようになり、それまでの漢方医学を駆逐^{くちく}し、瞬^{また}く間に日本国内における医学の支配的な立場を確

立しました。

こうして現代西洋医学は、20世紀には先進国で圧倒的な支配力を持ちましたが、同じ20世紀の後半には、その内部に存在するさまざまな問題点が指摘されるようになり、これまで西洋医学によって片隅に追いやられてきた種々の代替療法が、再び人々の注目を集めるようになってきたのです。

代替療法の 矛盾と共通項

代替療法は、その地域や時代的背景により誕生の経緯がそれぞれ違います。そのため複数の代替療法を比べた場合、互いの治療法に矛盾が生じることがあります。

代替療法に詳しいアメリカの医師、アンドルー・ワイル博士は著書『人はなぜ治るか』のなかで、この疑問を以下の6つの項目でわかりやすく回答しています。

①絶対に効かないという
治療法はない

あらゆる代替療法は、体の組織などにおいて解剖・病理的な異常が見あたらないにもかかわらず器官や臓器などの働きが低下する機能的疾患だけではなく、内臓や神経、筋肉、器官といった各組織において病理的・解剖的な異常が生じた事により引き起こされる器質的疾患にも治癒例があります。

②必ず効くという
治療法もない

すべての治療法は、治効理論がいかにか論理的・科学的にみえようと、いかに望ましい処置を施そうと、ときによっては治療に失敗することがあります。現代西洋医学でもこの結果は同じであり、これは科学が無効性を証明している治療法がなぜ効くのかという問題に劣らず重要です。

③各治療法は
つじつまが合わない

代替療法の世界では、互いつじつまが合わない理論に基づいた治療法がたくさん存在していま

す。これは治療へのアプローチは違っていますが、その本質においてすべての治療法には共通のなにかがあるからです。また、さまざまな治療法があるおかげで、利用者はそれぞれに最も適した治療法を見つけることができます。

④草創期の

新興治療法は効く

それぞれの代替療法には、新しく樹立された治療法が時代とともに力を失っていくという傾向があります。かつて多くの病気の治療にめざましい成果をあげた治療家たちも、1、2世代の弟子たちにはその技能を伝承できていても、とさが経つにつれて、たとえ師の教えを忠実に守っていても治療効果は弱ってしまうものです。

⑤信念だけでも

治ることがある

ルルドの泉のように霊場や癒しスポットを訪れるだけで器質的疾患が治りうるといふ事実は、体に何ひとつ刺激を与えなくても、信

念の力だけで治療効果が得られるということを示しています。健康と治癒を包括的に考えるためには、この事実も受け入れなければなりません。

⑥以上の結論を包括する変数

は治療に対する信仰である

ひとつの治療法を信じる度合いは、治療家によっても患者によっても大幅に異なります。信念だけでも治癒力が発動するとすれば、人によっては納得できない治療法が他の人には効くことは、それほど不思議なことではありません。

代替療法を積極的に 利用して、自分の体にも もっと責任を持つ

病気であることと健康であることは相反する二つの状態ではなく、病気も健康も、人のあり方の一つにすぎません。ワイル博士が、前述のように代替療法を包括する変数は信仰、つまり強い信念であるといっているように、信仰によっ

て自然治癒力が高まると言い表すことができそうです。自然治癒力とは、心の偏りや、体の滞りを取り除いて生命エネルギーの流れやバランスを回復させる力のことで、この力が高まると人は自ずと健康になっていきます。そして、この自然治癒力を高めるための、心や体を癒すさまざまなアプローチが代替療法なのです。

このようにして、それぞれの代替医療の特徴と、治癒のプロセスを理解すると、人は自分の体に対してもっと責任を負うことができるようになります。

自分の健康に自分で責任を負うためには、医師や医療機関を頼って健康問題を解決するという姿勢を、私たちも改めなければなりません。

そうすれば、自分にもっと適した代替療法を見つけることができ、それぞれの人にとって適した治療法や治療家に出会うことができるようになります。

※ルルドの泉…フランスとスペインの国境の町、ルルドのある泉。
医師から見放された病がこの泉の水によって癒されるといわれている。



リス、グラスゴウの大学病院。この敷地の一
グラスゴウ・オメオパシー病院があります。

帯津良一

医学博士・帯津三敬病院名誉院長

人間まるごとをみる

ホリスティック医学を志すものとして、
避けては通れない

ホメオパシー医学

何らかの理由で
生命場のエネルギーが
低下したとき、
人は病気になるります。
病気になるると、
これを回復すべく
「自然治癒力」が働きます。
このとき、他からの働きかけで
回復することを「癒し」、
自らの努力で向上を
はかることを「養生」と呼びます。
この「癒し」を担う
ホメオパシー医学は、
人間まるごとをみる
ホリスティック医学にふさわしい
医学です。ホメオパシー医学に
ついての過去、現在、未来を
ご紹介します。



Profil おびつりょういち

1936年埼玉県生まれ。1961年東京大学医学部卒業。東京大学第三外科助手、都立駒込病院外科医長を経て、1982年帯津三敬病院開設。日本ホリスティック医学協会会長、日本ホメオパシー医学会理事長。ホリスティック医療の第一人者。東京大学卒業後、外科医として食道がん治療をしていく中で、いわゆる西洋医学の限界に気づく。漢方や鍼灸、気功などの中医学も取り入れた治療をするために1982年に埼玉県川越市に帯津三敬病院をつくり、常にホリスティック医療推進のトップを走る。2001年にはホリスティック医学を目指す、帯津三敬整クリニックを東京・池袋に開設。現在、理想のホリスティック医療を実現するために新しい病院を建設中。

ゼロからのスタートでホメオパシー医学を学ぶ

ホリスティック医学を
目指している中で
ホメオパシー医学に出会う

「気」に関心のあるドクターの集まりで「気の医学会」という会があります。何かをやるときには30人くらい集まってやるような小さな会なんですけれども、毎年夏にどこかホテルに泊まって1泊か2泊でワンテーマの勉強会をやつて



イギリスのグラスゴウ・ホメオパシー病院でレメディの説明をするボブ・レクリッジ医師。日本ホメオパシー医学会の生みの親です。

います。

その勉強会のテーマは世話人会というところで決めますが、私が副会長をやつていて、企画委員長もやつているのです。だからいろいろとテーマを企画していかなくちゃいけない。

ちょうど今から10年ぐらい前の話ですけど、ホメオパシーをやつてくれないかと世話人会に持ち込まれました。それで、講師を呼んできたのですけれど、そのときはホメオパシーについて、今のように関心があったわけではありませんでした。

でも、その前にロンドンのホメオパシー病院には行っていたんです。それはホメオパシーがやりたくて行ったのではなくて、代替療法の一つのスピリチュアル・ヒーリングをロンドンに学びに行つて

いるときに、自由行動の日に「ホ

メオパシー病院の見学」を向こうにいたロンドン大学の学生が私のために計画してくれていたのです。当時はホメオパシーに対する関心はあまり湧いてきませんでした。ですから、「気の医学会」の講義も、「どうせ私が司会役をやるのだからつきあつて聞いてみよう」という程度でした。

そしてほんやり聞いていたのですが、「ただの水みたいなものがなぜ効くのか」という受講生からの質問に「薬の霊魂が効くとホメオパシーでは考える」という回答がかえってきたのです。

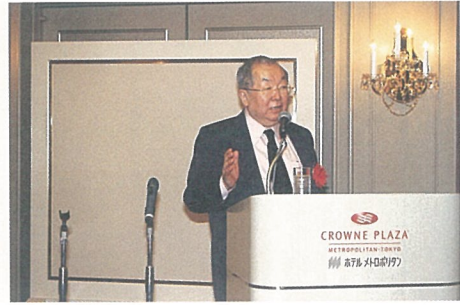
「なんだって、ただの水じゃなくてそこに霊魂が住んでいると…」それを聞いたときにぱっとひらめいたのです。霊魂というのは場のエネルギーですから、これは「場



ギリシャのアロニソス島にジョージ・ピソルカス氏を訪ねて行ったときの写真。ヨーロッパにはピソルカス氏の信奉者が多く、帯津先生が訪れたときも50人ぐらいが症例を持ち寄って検討会を開いていたという。



ホメオパシーセミナーで、ナラティブ（患者さん一人ひとりの物語）の大切さを説明するホメオパシーの第一人者、ボブ・レクリッジ氏。一人ひとりの物語には一つひとつ違ったレメディがあると言います。



東京・池袋のホテルメトロポリタンにて2004年5月に、イギリス、グラスゴウのファカルティ・オブ・ホメオパシー会長のボブ・レクリッジ氏を招いて開催されたホメオパシーセミナーで挨拶をする帯津先生。

「の医学」だと思いました。その瞬間から急に興味を持ち始めて、それからあの講義は一所懸命聞きましたね。

この後、さつそく「これを習うにはどうしたらいいのか」と聞くと「ロンドンに行つて、しかるべきところで勉強するのが一番いいだろう」と言われました。

しかし、現実には病院をやりながらロンドンに行くなどできない。そのとき私が考えたのは、医者資格で診療できるわけですから別に資格はいらない、実力さえつければいい。だから、「とりあえず基礎を教えてください、ただし一年ぐらいいし時間がなくて、基礎中の基礎でいいから教えてください」と頼みました。

そうしたら、「いいですよ」という返事でした。これが私とホメオパシー医学との最初の出会いです。講義は2000年の3月に始まりました。でも、私の場合は忙しくて講義になかなか出席でき

ないので。初めから講義の日に講演の予定も入ってしまいましたからね。あんまりいい学生じゃなかったと思いますよ。

ところが3月頃から勉強を始めて、そのことを私の病院の患者さんに話したら「ホメオパシーを受けたい」と希望が多くてね。最初は修行中だからダメだといっていました。ところが、とにかく、せっつかれて断りきれず7月頃から病院で始めました。勉強を始めて4か月です。しかも、まだ何回も講義を受けていないから、手探りで独学だしそれは大変でした。「レパトリ（※1）」と「マテリア・メディカ（※2）」に首っ引きで始めました。

こちらは修行中の身で、まだ何ともつかないんだからお金なんか取れない、と言うことで無料で始めたんです。無料ということもあって、患者さんにとっても人気で、わんわんやりたがるわけです。言つては悪いけれど、それが勉強

になりました。

ホメオパシー医学の日本での普及のため 医学会を立ち上げる

同じ時期に「日本の医療の中にホメオパシー医学を普及させるのには、医者がやらなくてはダメだ。そのためには医者学会をつくらなきゃダメだ」という気運が高まりました。そして私が理事長を引き受け、日本ホメオパシー医学会が2000年の1月に発足しました。学会といつてもそれほど集まらないだろうと思つていたら、予想よりも集まって、50人くらいが設立総会に来たんです。

学会の方は指導団体を決めなくちゃいけないと考え、さつそく板村論子先生（※3）がいろいろと調べてくれて、イギリスの「ファカルティ・オブ・ホメオパシー」という医者だけのホメオパシー団体へ話をつけました。そうしたら「協力する」と言ってくれたのです。

※1 レパトリ…ホメオパシー薬を症状別にまとめた事典。※2 マテリア・メディカ…ホメオパシー薬がどのような肉体的、精神的などの特徴をもつかを記載された事典。※3…板村論子先生は13ページに登場しています。

ホメオパシー医学は現代医療の 修羅場をくぐって来た医者でないといけない

ホ

メオパシー医学の
研修制度
グラスゴウモデルを確立

ちょうど2000年の10月に、「ファカルティ・オブ・ホメオパシー」の2年に1回のコンGRES（学芸）がイギリスのバースで開催することになっていました。「そこへ1回、出席しませんか」と誘われて行きました。

そこで、当時会長のボブ・レクリッジ先生にお会いして、日本の研修をバックアップすると確約をとって帰国しました。日本で研修制度を敷くにも、まずは世話人が勉強しなくちゃいけないので、イギリスから講師を招いて世話人だけで勉強しようと思っていたら、なかなかそれが実現できませ

ん。あとで考えたら、イギリス側にも豊富に人材がいるわけではないから大変だったんですね。

私は、「向こうが来れないなら、

こっちから行こう」と提案して、それでイギリスのグラスゴウへ学びに行くことになったのです。2001年の春先あたりでした。

そしてグラスゴウへ行き、1週間、朝から晩まで集中講義を受けることを2001年から2002年にかけて5回やりました。それで向こうの3年分の勉強を終わらせました。すごく中身の濃い講義だった上に、講義はすべて英語で通訳が入るため、どうしても時間が余計にかかるのです。

そのあと帰国して日本での研修制度を設けました。これがグラスゴウモデルです。初めは私たちただ

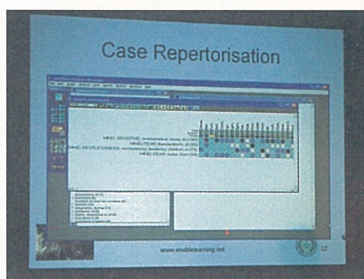
けでは教えられないから、グラスゴウのホメオパシー病院のデヴィット・レイリー院長にも来てもらっていました。

彼は年齢はボブ・レクリッジ先生と同じで、実力者です。その後私たちもだんだん経験を積んで、今では板村先生が中心となり、グラスゴウがちよっと手伝う。あるいはグラスゴウ以外のイタリアのマッシモ氏など、海外の実力者をときどき招くというかたちで運営しています。

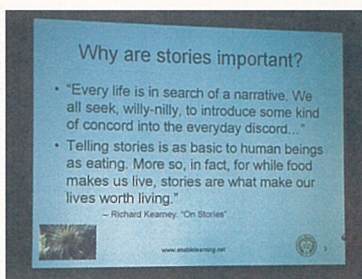
ホ

メオパシー医学の
治療は経験豊富な
医師がやるべきこと

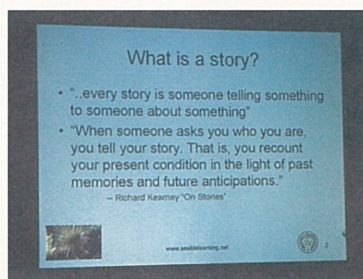
西洋医学の医師のなかにも、患者さんの病態にかかわらず決められた計算どおりのことをやってい



ホメオパシーの薬、レメディを選びだす作業をレパトリゼーションと呼びます。写真は、コンピュータのソフトを使用してレメディを選ぶ行程の説明です。



ホメオパシーでのナラティブとは、患者さんが語る物語の事実や詳細だけでなく、どのように語っているか、どのくらい情熱を持っているか、まで焦点を当てていきます。



ホメオパシーの治療では、医師と患者さんとの話を通してその病気の症状を理解し、病気の像と対応するレメディをレパトリゼーションにより探します。

るだけの人や、臨床医でも非常に怖い思いをしながら育ってきた人と、そういう経験を積まずにきた人がいます。

生きるか死ぬかの患者さんを常に見てきた医師は、いろいろな怖さがわかっていきます。「これから先へ行くと危険だな」とか、「この状態ではもう少し様子を見ても安心だ」とか自分が経験した怖さが、その都度、頭の中にひらめくのです。現代医学の修羅場をかくぐつてきた人ならば、ここでやめようとか、これは違う方法をとろうとか、常に考えるわけです。

ホメオパシーではこういう経験が生かされることが多く、ホメオパシーだけで他の治療法を持たないと、必ず問題が起これると思えます。

もう一つ、ホメオパシーだけに頼る治療しかしていない人のなかには、「ホメオパシーには西洋医学的な思考過程が邪魔なんだと、だからホメオパシーをやる人は西洋

医学を一回捨てた方がいい」と言う人がいます。でも、私の経験からすると決してそんなことはないですね。中国医学でもそういうことを言う人がいるんです。でも、私は「なんでも手持ちとして武器があった方がいい」と考えます。これは私の持論ですが、どんな病気であれ、一つの治療法だけに頼って最後まで行くのはよくない。壁にぶち当たったら他の治療法に目を向ければ、意外とそこを救ってくれるものはありますからね。やっぱりある程度の戦術をそろえて戦略を組み立てる、ということが必要になってくるのです。

ホメオパシー医学はエビデンスを超える直観の医学

ホメオパシーを治療に取り入れていく中で、エビデンス（科学的根拠）が乏しいという意見が出る場合があります。しかし現代医学にエビデンスがあるからといって、

て、現状では治らない病気もあるし、病人もどんどん増えています。

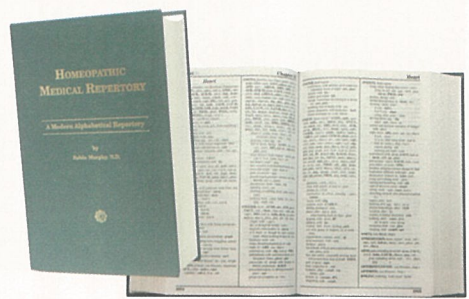
そもそも、こう反論すること自体が意味のないことで、人間まるごとをみる医療を目指している私にとつては、ボディ、マインド、スピリットを渾然一体として捉えることが目的です。科学が解明していないものにアプローチしているのですから、エビデンスがどうのという議論に参加しても科学の進歩に見合っただけのエビデンスしか得られません。

だから、臨床の現場でもエビデンスを求める努力を評価しながらも、これに深入りすることなくエビデンスの不足は直観で補ってあげばよいと思っています。

直観にはエビデンスを超えた何物かがあります。医療においてもわかり。現に直観が軽視されてしまった分だけ、今の医療が殺伐としてきたのではないかと思えます。この直観の領域を豊かに含んでいるのがホメオパシーで、私は

ホメオパシーを直観の医学だと位置づけています。

ホメオパシー医学は、エビデンスがない分、客観性、再現性に劣るわけですので、治療家は常に謙虚である必要があります。その意味でも、ホメオパシーは西洋医学の知識を身につけている医師であることが望ましいと思えますね。「エビデンスの塊」のような西洋医学を身につけていると、ホメオパシーの足りないところや西洋医学を凌駕しているところがみえてきて、治療者も謙虚になります。



帯津先生が診療で使用しているレパートリー（ホメオパシー薬を症状別にまとめた事典）。症例とレメディーを多角的に検討するための情報が詳しく書かれています。

ホ

メオパシーを
医療へ取り入れることへの
期待と効果

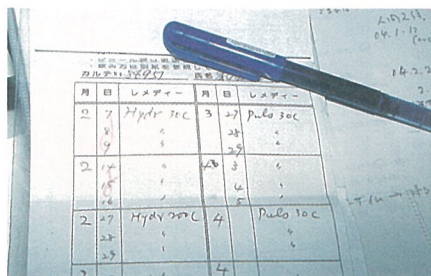
ホメオパシーが日本にもっと浸透すると医療の質は向上すると思います。一つは治療法が豊富になるからです。これはもうダメだというあきらめていた症状もあきらめないで済むようになります。

それからもう一つ、ホメオパシーは人間の心理的状態の改善に



診断する

ホメオパシーの診断は、患者さんからの聞き取りが中心です。私はホメオパシーだけを行っているわけではないので、回診のときに少し話をして、後は質問票をもとにして診断をしていくという方法をとる場合もあります。



カルテを書く

質問票はA4版の用紙に約10ページにわたって、さまざまな質問があります。本来は1時間なり2時間かけて、患者さんの話をささげずにゆっくり聞いて診断します。



レメディーを選ぶ

患者さんの話や問診の結果から、心や命の状態をつかみ取り、その状態をパターン化し、レメディーの辞典と照らし合わせ、最も適したレメディーを選んでいきます。



容器に詰める

ホメオパシーの薬、レメディーは植物や動物や鉱物から採取し、希釈して浸透させた母液（マザーティンクチャー）を、甘い砂糖玉に染み込ませたものです。レメディーボトルに入れ、ラベルを貼って完成です。

とても役立つわけです。

がんにしても、リウマチもそうですが、慢性疾患の人は気持ちの上でいろんな問題を抱えているでしょう。不安やいらだち、悲しみ、怒りとかね。そういうものや死の恐怖を和らげる医学としてはホメオパシーがいちばんだと私は思っています。

そういうことから心理的な面にホメオパシーが入ってくると、治療の幅が広がります。さらに、医師

は診断をするために人間まるごとを観るくせがつかますから、それ

で患者さんのいうことをよく聞くお医者さんが増えてくるのです。

ホメオパシーを医療に取り入れると、些細なことでもきちつと受け止めることができ、そういう意味で、まず治療法が豊富になってあきらめないで済むことができます。それから、心の治療に目が開かれていくことと、人の話をよく聞くという医療者が増え

てきます。

こういうことで医療はよくなっていくと思うんです。

さらにいえば医療費の削減になるわけです。ホメオパシーのレメディーは現代医学の薬と比べて非常に安いので、これで病気を治すことができれば、お金をかけなくてもいいわけです。そういう意味でもホメオパシーが医療に入ることによって、いい点がいっぱい出てくるのです。

治療の幅が広がるホメオパシー医学は 理想のホリスティック医学

応急手当に基本的なレメディを使用するのであれば、あまり間違いはないと思いますが、本来、ホメオパシーのレメディは、自分で処方するには相当広くて深い知識がないと危険です。

ホメオパシーによるがん治療とホリスティック医学

私の病院で、ホメオパシーをがん治療の一環に取り入れ始めた頃、「ホメオパシーでがんは治りますか？」という質問を受けました。

そういう質問を受けたときに、すかさず、「では、西洋医学で治りますか？」と切りかえていた時期もありましたが、今ではそのような議論はしないようにしています。ホメオパシー医学にしろ、西洋医学にしろどちらも素晴らしい医学体系であり、互いを比較することの方が愚かであることに気づいたからです。

正確に言うと、ホメオパシーは

生命場に働きかける医療なので、治してはなく癒^{いや}しです。今では、「ホメオパシーでがんは癒せませんか？」という質問には自信をもって「はい」と答えます。

実際、がん患者にレメディを投与して、がん細胞が縮小したわけでも痛みが消失したわけでもありませんが、「なんだか体力がついてきた、気力が出てきた、痛みは同じでも前ほど気にならなくなった」という回診での患者さんの発言は、日常茶飯事になっています。

ホメオパシー医学だけではなく、すべての生命場を高めるエネルギー医学について言えることですが、あまり治った、治らないにこだわりすぎると、その本質を見誤ることになりかねません。正しい道に進めなくなります。

治った、治らないの二極化は、20世紀の西洋医学のめざましい発展が生み出した一種の呪縛^{じゅばく}です。医療者も患者さんもこの呪縛から抜け出してほしいということが、ホリスティック医学を目指す私の考えの一つです。そして、その一役を担^{にな}うホメオパシー医学を日本の医療の中でしっかりと育ててゆきたいと思います。

レメディはインターネットや通販で誰でも購入することができますが、私は医療の中で広めるというのが基本と考えています。「どうしても」という人は、一度、病院にきてもらって診察してからレメディを処方するようにしています。

